

認定病院の 改善事例紹介 シリーズ

Improve

Vol.6
一般病院1

紹介事例

医療法人清仁会

洛西ニュータウン病院

—退院後も続く、患者との絆を結ぶチーム医療—

医療を見つめる第三者の目。
それが病院機能評価です。



公益財団法人 日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care

<http://www.jcqhc.or.jp/>

日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構は、国民の健康と福祉の向上に寄与することを目的とし、中立的・科学的な第三者機関として医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う公益財団法人です。



病院機能評価は、患者さんが安心して安全な医療を受けることができるように「病院の改善」を支援する仕組みです。サーベイヤーと呼ばれる専門調査者が病院を訪問し、病院の取り組みを評価します。病院外部の第三者機関による評価を上手く活用することで、これまで院内では気付くことができなかった課題や強みなどを明らかにすることができます。

評価の結果、一定の水準を満たしていれば「認定病院」となります。評価を受けることで明らかになった課題を改善し、認定を更新していくことで、継続的な質改善活動を行うことができます。

評価は、病院の特性に応じた6つの機能ごとに行われます。



第6号では『一般病院1』版の病院機能評価を活用して改善に取り組んだ事例を紹介します。

退院後も続く、患者との絆を結ぶチーム医療

医療法人清仁会 洛西ニュータウン病院の場合…

大病院ではない、私たちだからできることがある——。顔が見える情報伝達や多職種連携で協働して、ニーズが異なる患者一人ひとりに最適の医療を提供する洛西ニュータウン病院を紹介します。



私が院長に就任する前、前職の病院で病院機能評価を受審・認定されたが、その過程で醸成された全職員の一体感や達成感、整備された病院システム等のことを思い出し、新任したこの病院でも機能評価受審というツールを用い、職員の一致団結やマニュアル・規程等の整備を目指そうと考えた。5年間、受審を目標に多職種連携をはじめとする様々な改善に取り組んだ結果、比較的高い評価で認定され、その後の病院の質の向上に寄与したと思っている。(咲田院長)

安心の一貫フォロー — 外来窓口の工夫 —

一般病床、地域包括ケア病床、医療療養型病床を有する同院。前方と後方のいずれからも紹介があり、様々な疾患、医療ステージの患者が来院するため、外来の窓口体制が充実している。

例えば、がんであれば専任の認定看護師が配置されており、患者状態に合わせて各部署に出向き、患者・家族と関連職種をつなぐ。外来通院を経て在宅療養に入る際も、訪問看護師に連絡をとり情報共有するなど、一貫して支援している。

がん患者サポート外来を担当する西邨（ニシムラ）看護師は、2010年に病院から支援を受け、がん化学療法看護認定看護師を取得後、2014年から現在のポストを務める。病院機能評価により、同意書やマニュアルの整備がなされ、全員がマニュアルに沿って基本的な業務が出来るようになったことで、西邨看護師一人が全ての業務を負担することはなく、外来窓口の全員がきめ細かな対応を出来るようになった。

患者の意思決定をとことん支援

通院当初から患者の状態を知る看護師が、入院中、退院後までフォローすることで患者・家族が得る安心感は大きい。退院後の患者から休日、電話がかかってきて相談されることもあるという。



「必要なのは、患者さん自身が望む生き方に少しでも近づける医療です。ここに来てよかったと思っていただけの病院を目指します。」(西邨認定看護師)

「一人ひとりの患者さんにとって、何が質の高い医療なのか常に考えています。患者さんがどこにいらっしゃっても最良の療養環境を提供するのが私たちの病院の役割です。」(畑田看護部長)



「決めるのは患者さん。私たちは意思決定を支援するため、あらゆることをやる」という想いのもと、今後、さらにきめ細かな電話対応や、訪問看護ステーションとの連携を目標としている。

チームだから越えられる — 入院中のプロブレム対応 —

頻回のカンファレンスと回診を重ね、検査と継続評価、嚥下訓練、栄養管理などを包括的に提供する。患者にとって切実な願いである「口から食べたい」を叶えるのは、同院のNST(栄養サポートチーム)だ。

病院機能の改善で生まれた「決意」

院内には、専門職種が部門横断的に連携する25の委員会があるが、以前は数も半分ほどで、ほとんど機能していなかったという。現在のような、患者中心の医療を提供できるようにするため、病院機能評価受審をきっかけに院内の基盤を整えた。活用されていなかったマニュアルを実態に沿うよう改訂を重ね、医療安全管理の視点を抜本的に見直すなど、5年にわたる改善に取り組んだ。

NSTの立ち上げは本取り組みの一環。「患者さんの願いを最大限に叶える」と話すスタッフの一人ひとりに、チーム医療に挑戦していく決意が見える。この決意が、回診やカンファレンス、勉強会、他病棟からのヒアリング、研究発表といった活動の一つひとつ増やしてきた。

職種同士、チーム同士の連携

NSTとSST(摂食・嚥下サポートチーム)を兼任する夫津木言語聴覚士は、嚥下障害の改善に医科歯科連携は不可欠という。「難症例の成功は院内スタッフにもよい刺激となり、提供する医療に対するモチベーション向上につながります。今後、さらに多職種連携を推進していきたい

いです」と話す。チーム同士の連携の重要性も指摘するのは、NSTリーダーの趙医師。

「個々人だけでなく、チーム同士が連携することでさらに医療の質があがります。今後は緩和ケア、褥瘡、リハビリなどのチームとも密に協働していきます。」(趙医師)



退院後までを見据えたチーム医療

改善の成果は患者・家族だけでなく、市民講座の開催やほかの医療施設での研究会などの形で地域に還元されている。今後はいっそう地域への貢献を、と話すのはSSTリーダーの三牧医師。



「退院後の患者さんを考えれば、在宅主治医と密に連絡を取っていくのが理想です。共通のNST管理報告書を準備したり、訪問も視野に入れていきます。」(三牧医師)

ただ多職種が集まるだけではなく、チームとして「患者を中心に動く」ことを意識して作り上げた同院のチーム医療。「患者ありき」を強みに、今後も同院のチーム医療の取り組みは続く。

連携室が結ぶ患者・地域との絆 — 退院支援 —

一般病床数200床規模の同院に2007年に設置された地域連携室。社会福祉士の配置のない状態からのスタートだった。サービス向上のため関連医療職が連携する現在の体制が整備された。例えば、後方連携では、介護状態スクリーニングに基づいた退院調整、または地域包括ケア病棟に移って在宅支援を行ってから自宅に戻っていただくマニュアルが実態に即して運用されている。後方支援を担当する清水医療ソーシャルワーカーは日頃、患者のスムーズな退院後の生活のため、患者・家族の意向や病棟スタッフからの情報を聞き取ったり、ケアマネジャーと患者宅に出向いたりして、活用可能な支援制度の提案など福祉面についても検討を行っている。

顔が見える連携室

「退院後も、外来になっても、在宅になっても、関係はずっと続いていきます。」と話す清水医療ソーシャルワーカーは同院の地域連携室を、顔が見える連携室と呼ぶ。職員にも、患者さんに対しても、事務的ではなく「納得感」をもってもらえる連携を心がけているためだ。「納得感」を大切にできている背景には、各職員の「足を使う心がけ」があった。

「なるべく病棟にも在宅にも行って、お会いして話すようにしています。私たちの病院だからできることを、患者さん一人ひとりのためにやっていきたいです。」(清水医療ソーシャルワーカー)



「病院機能評価を受審する」と咲田院長が宣言してから、実際に受審するまでの5年間、職員は改めて「優しさと思いやりの心をもって、質の高い安心で安全な医療を提供します。」という病院の理念に立ち返った。理念を実行するために、委員会や規程、マニュアルの整備など、丁寧に改善を重ねることで、院内の「標準化」を図ってきた。標準化が図られた結果として、職員は働きやすくなり、一人ひとりが自身の役割を最大限発揮できるようになった。

受審を意識するまでは受動的だった院内の空気も、好循環がめぐる今では、職員全員が常に新たな目標に向かって

【写真】 毎週カンファレンスで介入例について検討し、情報共有の上ラウンドを行う



患者家族へのヒアリング内容、嚥下や栄養状態、褥瘡などの評価を共有、検討。



(左から) 夫津木言語聴覚士、三牧医師、榎川管理栄養士、リンクナースの谷崎看護師、田村看護主任

病院機能評価受審の効果

院内のモチベーションが落ちたとき、流れを変えてくれたのが病院機能評価。
「患者さんのため」という思いで再スタートが切れました。

患者の求めるものが分かる 最良のツール

同院の前身は大学附属病院。当時は病院機能評価を受審していたが、民間病院へ経営が移譲されたことで職員のモチベーションが落ちたという。咲田院長は「もとは基盤もしっかりしているのに…驚きました」と2010年に着任した当初の危機感を振り返る。

即時「病院機能評価受審」が目標に掲げられた。認定病院から転任した咲田院長自身、患者が求めるものと評価機構の求めるものは、いつの時代も一致することを理解していたからだ。

体裁の整備ではなく実情の変革

受審に向けまず必要なのが、委員会や規程・マニュアルの整備。多くの病院が最も大変と感じるプロセスだ。同院の職員も前回受審後は困難という印象が残った。「前回受審後、その経験が実務



に活かされておらず、また、受審後の継続的な取り組みが行えていない、結果として受審のための受審だったという印象を感じていました」(猪木事務次長)。

しかし今回は違った。受け身だった職場環境から、職員一人ひとりが「患者のため」を自身の理念にし再スタートを切った。「形を整えるのではない、実際を変える」と認識し、理念を落とし込んで現場に即した体制を作り込んだ結果、今回の受審は「自分たちの思いや取り組みは間違っていなかったと認められる答え合わせのようでした」(畑田看護部長)という。

シームレスな支援を在宅へ

同院は、地域包括ケア病棟、訪問リハビリテーションなどが整備され、今後は回復期リハビリテーションへ参入する予定である。在宅に移った患者さんの生活をフォローするため訪問看護・診療も視野に入る。地域で同院が担う役割は、さらに重要になっていく。

編集後記

今回の取材で、職員の皆さんがお互いのことを非常に信頼し合って仕事をしている、という印象を受けました。おそらく、一人ひとりが職務を全うしていること、かつ、それを職員全員が自信を持ってできるということが、そうした信頼関係を生み出しているのではないかと思います。さらに、病院全体として、職員の「もっと病院を良くしたい」という想いをあたたかく見守り、支える体制があるように感じました。

当たり前のことかもしれませんが、職場を働きやすい、魅力的な場所にするための第一歩は、職員一人ひとりの心がけや仕事の仕方が鍵になると感じた取材でした。

(久米麻莉菜)

バックナンバーのご案内

バックナンバーは評価機構のホームページよりご覧いただけます。

<http://www.jcqhcc.or.jp>



●Improve Vol.5 リハビリテーション病院 (2016年1月発行)
《紹介事例》鶴岡市立 湯田川温泉リハビリテーション病院
―「患者とともにある医療」をチームで推進する―



●Improve Vol.4 精神科病院 (2015年10月発行)
《紹介事例》医療法人社団光生会 平川病院
―チーム一丸となって患者の不安を取り除く―

●Improve Vol.3 一般病院2 (2015年5月発行)
《紹介事例》国立大学法人 信州大学医学部附属病院
―自発的な内部監査によって病院全体の質向上―

●Improve Vol.2 一般病院1 (2015年2月発行)
《紹介事例》医療法人杏仁会 松尾内科病院
―10年ぶりの第三者評価で強みと弱みを再発見―

●Improve Vol.1 慢性期病院 (2014年12月発行)
《紹介事例》医療法人社団明芳会 新戸塚病院
―改善風土の定着が組織を革新―

病院概要

平成28年2月27日現在

病 院 名	医療法人清仁会 洛西ニュータウン病院		
理 事 長	清水 史記	院 長	咲田 雅一
所 在 地	〒610-1142 京都市西京区大枝東新林町3丁目6番地 TEL 075-332-0123 / FAX 075-332-3355		
開 設	平成18年4月		
病 床 数	240床 (一般病床199床<うち地域包括ケア病床37床>、医療療養型病床41床)		
標 榜 科 目	内科、消化器内科、循環器内科、外科、脳神経外科、整形外科、リハビリテーション科、皮膚科、形成外科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、婦人科、放射線科、麻酔科、歯科、神経内科		

日本医療機能評価機構 認定病院の改善事例紹介シリーズ

Vol.6 一般病院1

2016年5月発行

発行：公益財団法人 日本医療機能評価機構
〒101-0061 東京都千代田区三崎町1丁目4番17号 東洋ビル
TEL：03-5217-2320 (代) / 03-5217-2326 (評価事業推進部)
<http://www.jcqhcc.or.jp>

